

福岡女大 中野 和子  
西南女学院中学 二木 栄子  
筑紫女学園短大 ○桑野 堇

1. これまでの研究に於て、我々は調理における三味質（甘味、塩から味、酸味）につき単独に与えた場合と、継続して与えた場合の耳下腺反射性唾液分泌量を検討したが、被験者により個人差の甚しいことを常に感じてきた。また、味覚感受性を表わす閾値についても個人差のあることが記されていることから、今回は両者における個人差の一要因として肥瘦体形を取り上げ、この味覚閾値および唾液分泌量への影響、また味覚閾値と唾液分泌量間の関係につき検討した。

2. 唾液分泌量の測定では、装置として、林・栖原の人耳下腺反射性唾液分泌量測定装置に準じたものを用いた。また、使用味質は調理上かなり高濃度の甘味、塩から味、酸味とした。被験者は、19～20歳の健康な女子学生30名で、それらを標準体、肥満体、瘦身体の3グループに分け、各グループ共、被験者を10名ずつ選んだ。閾値の測定では、蔗糖溶液、食塩水、酢酸溶液、塩酸キニーネ溶液を用い、極限法によって測定処理を行ない、刺激閾を求めた。

3. (1)体形と三味質刺激による反射性唾液分泌量の間には、有意な関係は認められなかった。(2)体形によって閾値は変化する。(3)唾液分泌量と閾値間をみると、固有唾液と塩酸キニーネ、蔗糖溶液との間に正の相関がみられ、反射性唾液については、分泌量の多い者程、閾値の低い傾向が見られた。